書き抜き読書ノート 385	2009 年 10 月 18 日

内村鑑三著「後世への最大遺物」ワイド版岩波文庫、岩波書店 1991 年 6 月 26 日刊を読む

1．私はたびたび聞いて感じまして、今でも心に留(と)めておりますが、私がたいへん世話になりましたアーマスト大学の教頭シーリー先生がいった言葉に…

2．(1)「この学校で払うだけの給金を払えば学者を得ることはいくらでも得られる。地質学を研究する人、動物学を研究する人はいくらもある。地質学者、動物学者はたくさんいる。

(2)しかしながら地質学、動物学を教えることのできる人は実に少い。文学者はたくさんいる、文学を教えることのできる人は少い。

(3)それゆえにこの学校に三、四十人の教授がいるけれども、その三、四十人の教師は非常に貴(とうと)い、なぜならばこれらの人は学問を自分で知っているばかりでなく、それを教えることのできる人であります」と。

3．これはわれわれが深く考うべきことで、われわれが学校さえ卒業すればかならず先生になれるという考えを持ってはならぬ。

4．学校の先生になるということは一種特別の天職だと私は思っております。

5．よい先生というものはかならずしも大学者ではない。

6．大島君もご承知でございますが、私どもが札幌におりましたときに、クラーク先生という人が教師であって、植物学を受け持っておりました。その時分にはほかに植物学者がおりませぬから、クラーク先生を第一等の植物学者だと思っておりました。この先生のいったことは植物学上誤りのないことだと思っておりました。しかしながら彼の本国に行って聞いたら、先生だいぶ化(ば)けの皮が現われた。かの国のある学者が、クラークが植物学について口を利(き)くなどとは不思議だ、といって笑っておりました。

7．しかしながら、とにかく先生は非常な力を持っておった人でした。

8．どういう力であったかというに、すなわち植物学を青年の頭のなかへ注ぎ込んで、植物学という学問の Interest(インタレスト) を起す力を持った人でありました。

9．それゆえに植物学の先生としては非常に価値のあった人でありました。

10. ゆえに学問さえすれば、われわれが先生になれるという考えをわれわれは持つべきでない。われわれに思想さえあれば、われわれがことごとく先生になれるという考えを抛却(ほうきゃく)してしまわねばならぬ。

11. 先生になる人は学問ができるよりも――学問もなくてはなりませぬけれども――学問ができるよりも学問を青年に伝えることのできる人でなければならない。これを伝えることは一つの技術であります。短い言葉でありますけれども、このなかに非常の意味が含まっております。

12. たといわれわれが文学者になりたい、学校の先生になりたいという望みがあっても、これかならずしも誰にもできるものではないと思います。

P57 ～ 58

［コメント］

学校に限らず、先生と呼ばれる人の果たすべき役割とは何かをこれほどわかりやすく説いた文章を私は知らない。先生と呼ばれる人は何度も読み直し、参考にして欲しい。

－ 2009 年 10 月 18 日 林明夫記－